

「GIGA部」と4教科の研究ブロックが 議論して練り上げる公開授業で、 「教科の本質」に迫るICT活用に発展

京都府 ^{やわた}八幡市立中央小学校

京都府八幡市立中央小学校では、2021年度、1人1台端末の配備に伴い「GIGA部」を設立。全校を挙げて行う公開授業や、活発な校内研修によって活用法を広げ、教員のICTスキルの向上に努めてきた。その結果、授業でのICT活用率は9割を超え、授業に欠かせないツールの1つとなった。2022年度からは、教科の本質に迫るICTの活用ができているかといった視点で授業研究を行い、ICTの活用を進化させている。

「まずは使ってみる」を目標に、 試行錯誤した1年目

京都府の南部に位置する八幡市立中央小学校が全校を挙げてICT活用に着手したのは、1人1台端末が配備された2021年度のことだ。校内のユニバーサル・デザイン（以下、UD）化を進めるUD部の中に、ICT活用の活性化と研究を担う「GIGA部」を設立。現・研究推進部部長の水谷^{あき}智明先生が部長となり、様々な試行をした。

「端末が配備された1年目は、教員がまず授業で端末を使ってみることで、子どもが端末を使って楽しく学べるようにすることを、全校で目標としました。GIGA部はその達成に向けて、様々な方法でICT活用の普及に努めました」（水谷先生）

その1つは、GIGA部が隔週で発行する「MEGA通信」だ。端末の操作テクニックや、授業支援ソフト・協働学習ソフトの使い方、授業での実践例などを紹介している。

職員会議後には、毎月10～15分間の「ミニ研修」を実施。端末を使いながら操作方法を説明したり、活用事例を授業者に紹介してもらったりと、すぐに授業で使える内容が中心だ。

年4回の**公開授業**では、市内の他

学校概要



開校 1976（昭和51）年
校長 横山達雄先生
児童数 272人
学級数 12学級（うち特別支援学級5）
教員数 32人

ICT環境
学習者用端末 タブレット型パソコン
通信環境 無線LAN
通信速度 約120 Gbps
その他のICT機器 大型モニター
ICT担当教員 4人（GIGA部）
ICT校内研修 年3～4回程度
ICT支援員 週1日、1人

校の教員も招き、丸1日かけて、8～10クラスでICTを活用した授業を公開。事後研究会では、アドバイザーの大学教授も交えて、ICTの効果的な活用法を議論する。

ICTを高活用な最大の要因は 職員室での日常的な情報交換

それらの取り組み以上に、ICT活用が活性化した要因として教員アン



校長
横山達雄

よこやま・たつお

2015年度に教頭として赴任。
2021年度から現職。



GIGA部 部長
岡村淳史

おかむら・あつし

同校に赴任して9年目。
特別支援学級担任。



研究推進部 部長
水谷智明

みずたに・あき

同校に赴任して7年目。
体育科、5学年担任。

ケートで断然トップだったのが、**職員室での情報交換**だ。ICTの使い方を日常的に伝え合い、活用法の悩みには皆で解決策を考える。教員の要望に応じて、GIGA部がオリジナルの教材を授業支援ソフトで作ることもある。

「教員間の結束の強さは、本校の強み」と、横山達雄校長は語る。

「本校は、特別な支援を要する子どもの割合が多く、かつて府内でも生活指導が困難な学校の1つでした。そこから、府の学力向上事業の指定を受けて行った言語活動の研究を通じて、先生方に一体感が生まれました。学年

を超えて児童の情報を共有し、UDの視点で各教室の掲示物の配置を統一するなど、教員がワンチームとなって子どもたちを育ててきました。そうした学校文化があったことで、ICT活用においても教員間の目線を合わせやすかったのだと思います」

授業のUD化の一環として、短時間の「フリー公開授業」も隔週程度で行っている。UDの視点で着目してほしい授業について指導案を提示し、該当する10～15分間だけを見に来てもらう。短時間の公開とすることで、できるだけ多くの教員が参加しやすいよう配慮している。

一連の取り組みにより、学校全体のICT活用率は9割*1を超えた。GIGA部部長の岡村淳史先生は、ICTを活用した授業で子どもが成長する手応えを感じられたことも、活性化を後押ししたと語る。

「紙に感想を書いていた時には『楽しかった』と一言しか書いていなかった特別支援学級の子どもが、端末には数百字にもわたって自分の思いを入力するようになりました。子どもの資質・能力を高める上で、ICTには大きな可能性があると感じています」

2年目は、教科の本質に迫るICT活用を模索

授業でのICT活用が一通り浸透したことから、2022年度は、若手教員の成長促進と、特定の教員への業務集中の解消をねらいとして、GIGA部をUD部から独立させて単独の部にした。岡村先生を部長とし、4人体制（低・中・高学年、特別支援学級から各1人）で、引き続きICT活用の活性化と研究に取り組んでいる。

校内研究は、教科の本質に迫り、「子どもの学びに効果的なICTの活用ができていないか」に着目して行ってい

る。研究推進部は、国語、算数、理科・生活、社会の4ブロックを設置し、全教員がいずれかの得意教科のブロックに所属（図1）。少人数で、濃密な検討ができるようにした。

ICTを活用する公開授業の指導案はブロックごとに作成し、事前にGIGA部と相談会を実施する（図2の⑤）。そこでは、教科の本質に迫る形でICTを使っているか、「主体的・対話的で深い学び」につながっているか、ICTを使うことでかえって授業の効率が悪くなっていないかといった視点で指導案を検討する。

例えば、国語ブロックは、教科書の全文を端末に表示し、重要な表現に罫線を引く活動を提案。それに対してGIGA部は、端末に全文を示すと文字が小さくなって読みづらいため、A3用紙に印刷して配布した方が読みやすいのではないかと伝えた。算数ブロックには、グラフの描き方

は授業中に教えるよりも、見本の動画を作成し、授業支援ソフトにリンクを貼った方が効果的で、子どもも繰り返し見ることができると提案した。

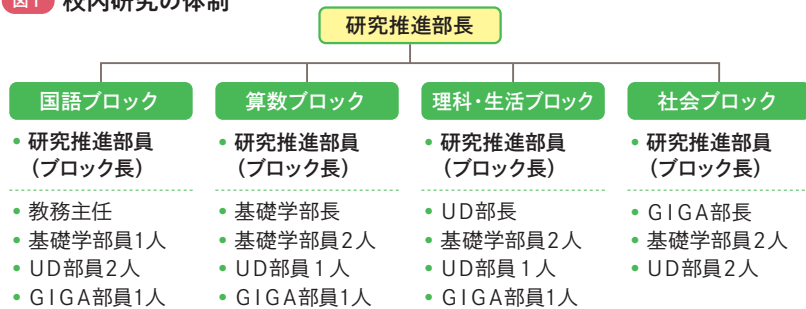
「ICTの有効な使い方にこだわることで、身につけさせたい資質・能力は何か、教科の本質に迫る議論までできるようになりました」（岡村先生）

各ブロックは、GIGA部からの提案を踏まえて指導案を完成させ、学校全体で共有してから公開授業を行う。そして、公開授業後には、ブロックごとに振り返りを行い、そこで挙げられた課題や改善点を学校全体で共有し、授業改善につなげている。

ICTで授業準備や説明を効率化。捻出された時間は学習活動に充当

教科の本質に迫るため、授業支援ソフトや協働学習ソフトの使い方も工夫を凝らしている。

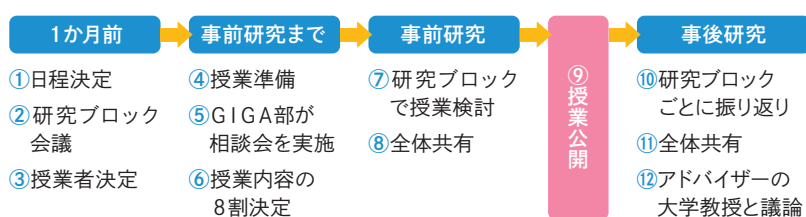
図1 校内研究の体制



各ブロックに研究推進部の教員を配置してブロック長とし、各部の部長は4ブロックに分散させた。そして、各部のメンバーも1～2人を、各ブロックに配置した。

※中央小学校の提供資料を基に編集部で作成。

図2 公開授業の流れ



※中央小学校の提供資料を基に編集部で作成。

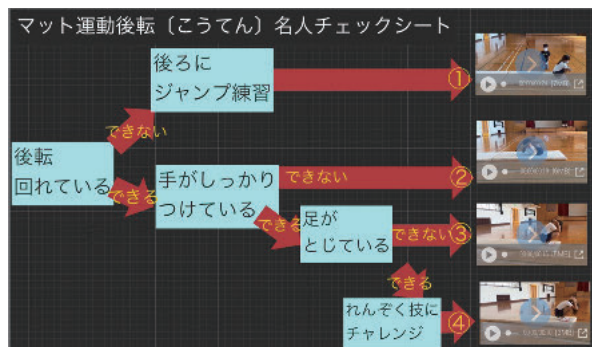
*1 2022年6月における、ベネッセの授業支援ソフトのWAU（週間アクティブユーザー数）は93.4%。

図3 国語のオリジナル教材



右の素材文を読み、左の6枚の短冊を並び替えて、あらすじを作るというオリジナル教材をオクリンク^{*2}で作成（製作時間15分）。
※中央小学校の提供資料をそのまま掲載。

図4 後転の練習メニューを選ぶフローチャート



自分がどこまでできているかを確認することで、どの練習をすればよいか分かるフローチャートと各練習動画をオクリンクで作成（製作時間10分）。
※中央小学校の提供資料をそのまま掲載。

楽しみながら読解力を高めることができます」（水谷先生）

体育の授業では、子ども同士で運動の様子を端末で動画撮影し合い、自分のフォームをスロー再生で確認したり、動きの手本の動画を視聴したりすることに活用している。最大のメリットは、説明の時間が短縮され、体育科本来の目的である運動量を十分に確保できる点だ。

例えば、器械運動で後転を学ぶ授業（授業レポート1～6参照）では、水谷先生が作成した練習メニューのフローチャート（図4）に従って、「手がしっかりつけているか？」→「できない」→②の練習、「足がとじているか？」→「できない」→③の練習というように、自分の習熟度に合った練習を選べるようにした。そして、手本の動画で動きを確認してから、同じ練習メニューを選んだ子ども同士が集まり、4つのマットに分かれて練習した。

「私が4つの練習方法を1つずつ実演すると、それだけで1時間が終わってしまいます。端末を使うとそれらの説明が省けるので、4つの練習を同時に展開することができました。また、自分で練習方法を選んでスキルを習得した経験は、自己分析力や、生

涯にわたって運動を続ける力や意欲を育むことにもつながります。生涯スポーツの観点からも、体育科の本質に迫る授業ができました」（水谷先生）

ICTは、子どもの学習意欲や学力の向上に欠かせないと実感

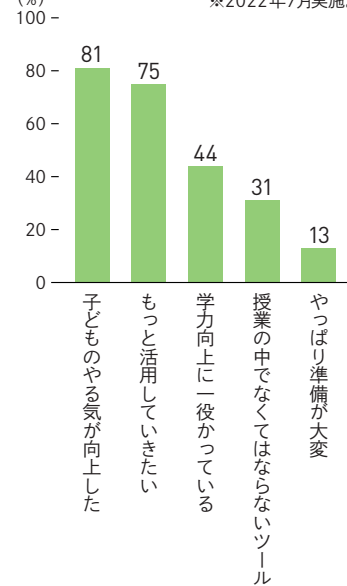
子どもへのアンケートでは、約9割が「タブレットを使った授業が好き」と答え、その理由では「授業が分かりやすくなるから」が最も多かった。教員もまた、ICT活用が子どもの学力向上につながっていることを実感している。教員アンケートの結果では、「準備が大変」といった否定的な意見は少なく、「子どものやる気が向上した」「もっと活用していきたい」「学力向上に一役かっている」と回答する教員が多かった（図5）。

以前はテストや振り返りなどが早く終わった子どもは手持ち無沙汰だったが、今は、デジタルドリルに取り組むようにしたことで、教室の雰囲気は以前に増して落ち着いたという。

「教員同士の仲がよく、温かい雰囲気の中で子どもが生き生きと学校生活を送ることができるのは、本校の大きな魅力です。これからも、先生

図5 教員アンケートの結果

●昨年度と今年度で、タブレットを活用して授業をした印象（複数回答）（%）
※2022年7月実施。



※中央小学校の提供資料を基に編集部で作成。

や子どもにとってアットホームな“あたたかい学校”をつくっていきたくです。そうした中で、ICT活用を通じて自分の成長を実感し、学ぶ楽しさを知る経験は、卒業後も学び続ける意欲や力を子どもに与えてくれるはず。目先の点数にとらわれず、教科の本質に迫る授業を追究していきたいと思います」（横山校長）

*2 モニタリング機能や、画面共有機能などで授業を支援する、ベネッセの「ミライシード」のアプリケーション。